

HANASAKA

バタフライギフトセット

プレミアムギフトバコ



HANASAKA

バタフライギフトセット

薫り高い茶葉でくつろぐティータイム。お気に入りのマグならいっそう素敵な時間になるはず。真っ白でシンプルなフォルムに、繊細な蝶が描かれたマグはいかがでしょう。これは九谷焼のマグ。華やかな上絵の印象が強い磁器ですが、艶やかで滑らかな素地も鮮やかな蝶の精緻な筆致も九谷焼そのものです。400余年の伝統と技、職人の想いが詰まった美しいマグです。

このカタログでは、下記の商品からお選びいただけます。



商品番号 / 6791

HANASAKA

バタフライギフトセット yellow

花坂陶石を原料とした九谷焼素地のきめ細かな肌を感じられるシンプルな形のマグ。持ち手に指をかけると、指先に蝶が止まっているかのよう。精緻に描かれた蝶のモチーフは日本の代表種ともいわれるアゲハチョウ。



商品番号 / 6792

HANASAKA

バタフライギフトセット blue

モチーフは世界三大美蝶とも宝石蝶ともいわれるモルフォチョウ。



商品番号 / 6793

HANASAKA

バタフライギフトセット orange

モチーフは「幸せを呼ぶ蝶」の別名を持つヒイロツマベニチョウ。



商品番号 / 6794

HANASAKA

バタフライギフトセット white

モチーフは翅の黒い縁取りや翅脈が美しいアサギシロチョウ。



商品番号 / 6795

HANASAKA

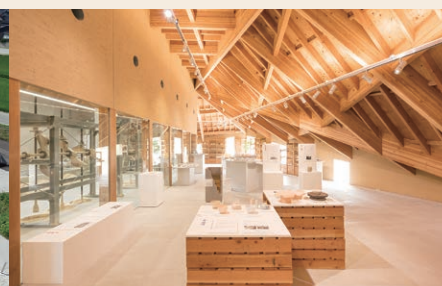
バタフライギフトセット green

モチーフはモルッカ諸島で見られる幻想的なヘリボシアオネアゲハ。

What's

HANASAKA
バタフライギフトセットとは

1. 九谷焼の材料「花坂陶石」を知り尽くした老舗のプロデュース
2. 実在する蝶を精緻に再現
3. ティーバッグにも蝶。カップの縁で羽を休める姿が美しい



陶石が粘土になる様子を間近で見られる全国唯一の工房

創業は1951年、3代にわたって花坂陶石を原料とした九谷焼の粘土を製造しています。2013年にHANASAKAのブランド名でテーブルウェアの制作を開始。「新しさの追求」を連綿と続けてきた九谷焼のアイデンティティを現代のライフスタイルにマッチングする形で表現。2019年には九谷焼の体験型複合施設「九谷セラミック・ラボラトリー」内に製土工場を開設し、工程の一部を公開しました。

谷口製土所

石川県小松市若杉町7124
TEL 0761-22-5977
[Instagram] hanasaka_rootsofkutani

九谷セラミック・ラボラトリー

石川県小松市若杉町91番地
TEL 0761-48-4235

Here!



ティーバッグにも色とりどりの蝶が。図鑑で見るような精緻な筆致は、置いてあるだけでも空間が華やかになります。



ミステリアスな逸話を持つ 九谷焼の新たな魅力

口元で傾ければ、指先に蝶が羽を休めているように見える華やかなマグ。美しい色彩でリアルな蝶が描かれたモダンなデザインのこのマグは、石川県が誇る伝統工芸のひとつ、九谷焼の器です。

九谷焼は、石川県の伝統工芸のひとつで、発祥は江戸時代初頭。

九谷五彩に加え金銀なども使用した豊かな色彩と緻密な絵柄が特徴として知られ、明治期には輸出も盛んに行われるようになって、海外でも高い評価を得ています。

そんな九谷焼には、実はミステリアスな逸話があります。

1655年頃に開窯した九谷焼は50年ほどの後、忽然と姿を消してしまいます。それから100年ほど経ってから、加賀藩主前田家の主導で再開を果たすのですが、廃窯の理由は今もわかっていないのだそう。

緻密で華やかな姿とミステリアスな逸話。九谷焼の魅力はそんなところにもあるのかもしれない。

古代から連綿と続く 石加工の技術と文化

現在の九谷焼は、1800年頃に現在の小松市に位置する花坂村から、白磁に適した陶石が発見されたことが始まりとされています。この石は産地にちなんで「花坂陶石」と名付けられ、200年以上経った今でも九谷焼は花坂陶石を原料として焼かれています。

そもそも小松市周辺は、弥生時代の碧玉の玉づくりを始まりとして、2300年にわたり金や銅の鉱石、メノウ、オパール、水晶、碧玉の宝石群、良質の凝灰岩石材、九谷焼原石の陶石などの石の資源を見出し、さまざまな形で人々の生活に利用してきました。

2016年には『『珠玉と歩む物語』小松～時の流れの中で磨き上げた石の文化～』として文化庁の日本遺産にも認定されているほど。固い陶石を砕き、磁器に使用する粘土に加工する技術も同様に、この地に古くから受け継がれた技術なのです。

九谷焼の未来のために 製土の視点からできること

そうした地域に受け継がれる石の加工技術と九谷焼の伝統を守っているのが、九谷焼の陶土を製造する「谷口製土所」。

原料となる花坂陶石を採石場から仕入れ、粉碎し、不純物を除去して粘土を作るこの会社の創業は1951年。3代目の谷口浩一さんは、32歳で家業を引き継ぎました。

「実は採掘した陶石の約40%は陶土として使うことができず、廃棄しているのが実情です。現在、九谷に製土所はたった2軒しかなく、九谷焼の一端を担う者として、自分にできることがもっとあるのではないかと感じました」

まず着手したのが自社ブランドの九谷焼「HANASAKA」の立ち上げ。九谷焼は上絵が注目されがちですが、素地の品質の高さも知ってもらおうと、あえてデザインはシンプルにしました。陶土にできない陶石も釉薬として使用しています。

次は2019年、九谷焼の美と技に触れられる



上/ティーバッグアソート。どの蝶をチョイスするかは、その日の気分に合わせて。
下/見眼が美しいだけでなく、口当たりの良さも九谷焼の特徴。

体験型複合施設「九谷セラミック・ラボラトリー」のオープンに合わせ、ラボ内に新しい製土工場を建設。ラボでは、花坂陶石の粉碎から陶土が完成するまでの工程の一部を間近で見ることができます。

「まずは知っていただくことが第一歩。それから使っていただくこと。そうすることで華やかな絵付けの裏側にある、素地自体のクオリティはもちろん、陶石を掘る山や自然環境の問題にも目を向けていただけるようになるのだと思っています」

バタフライマグ、そしてHANASAKAブランドは、九谷焼の伝統を継承しながらも、新たな可能性への挑戦、その飛躍を象徴するように羽ばたいています。

谷口 浩一さん



谷口製土所3代目。他業種で10年務めた後、32歳のときに家業である谷口製土所を継ぐ。代々続く粘土の製造に加え、オリジナルブランド「HANASAKA」の立ち上げ、花坂陶石をベースにした釉薬の開発、他素材とのコラボレーションなど、新たな事業も展開させている。



上/九谷セラミック・ラボラトリーに開設された工場は、陶石が粘土になる様子を間近で見られる全国で唯一の施設。

中/九谷焼の原石「花坂陶石」の採石場。九谷焼の原点にして日本有数の陶石山です。

下/粗砕後の陶石は、「スタンパー」という機械を使って、杵でつくようにして砕いていきます。

